

2026年度 共立女子大学 社会人特別選抜 試験問題

科目	学部	学科	専攻・コース
小論文	看護学部	看護学科	—
受験番号	氏名		
採点			

Ⅰ 次の文章を読み、設問に答えなさい。

新生児には、適切な治療と保護を受ける権利があることが医療界では共通した理解になっています。両親はわが子の治療に責任を負い、医療スタッフとともに治療方針を決定する義務と権利があります。ただ、その権利は、あくまでも「子どもの最善の利益」を代弁する形にならなければなりません。では、その病気があまりにも重く、障害が残ることが自明な場合はどうすればよいのでしょうか。

重い障害や病気のある子に対して治療をやめてもいいのか否かは、難しい問題のように思えますが、私は次のように考えれば正解に近づけると思っています。つまり治療継続の判断を、子どもの側に立つことで答えを出していけばいいのです。今行っている治療が、単に医者独りよがりの英雄（あるいは蛮勇）的行為か、それとも子どものこれからの人生までも視野に入れた患者本位の治療であるか、医療スタッフは真剣に考えるべきです。その際に、一人の力を持ったリーダーの意見に全員が引きずられるようなことがあってはいけません。医療は必ずチームで行われますから、参加するすべてのスタッフが自分の意見を述べることで、多角的に子どもの利益と不利益を論じられる体制を作っておくことが重要です。

赤ちゃんに対する治療が過剰診療か適正な診療なのかの価値判断は、時代とともに変わる面があることも否定できません。（中略）ですから、医師というのは慣習や経験にとらわれず、常に謙虚な姿勢で自分の医療を省みる努力が必要になります。しかしこのことは、口で言うほど簡単ではありません。名医といわれるベテランの医師は、自分の医療経験によって現在の地位があるからです。

たとえ障害がどれだけ重篤であったとしても、医療チームの一人ひとりが赤ちゃんの人権を尊重することができたとき、その医療スタッフは家族と一緒にいい医療ができると私は信じます。

出典 松永正訓著「いのちは輝く―わが子の障害を受け入れるとき―」

「4章 人間であることに基準などはありません」 P247-249 中央公論新社 二〇二五年

